大分大学大学院　学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー：DP）及び教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー：CP）

教育学研究科教職開発専攻　【教職修士（専門職）】			高度な知識と知的能力	確かな研究マネジメント能力	社会を牽引する能力
ディプロマ・ポリシー	既定の教育課程を修了し、以下の能力を修得した学生に、教職修士（専門職）の学位を授与します。		学校や教職の社会的役割と果たすべき使命を理解し，ビジョンを持って学び続けることができる。(DP1「使命感・責任感」) 学校経営，教科指導，学級経営，生徒指導，特別支援教育などの高 度な専門的知識を有し，理論と実践の往還を通した教育を具現化できる。(DP2「専門性・実践力」)	高度な専門的知識を基盤にした省察を行うことで，未経験の課題にも対応しうる教育を創造できる。(DP3「省察力・創造性」)	学校の多様な課題に対し，高度な専門性を発揮できる組織の中核的なリーダーとして，他者と協働しながら解決を図ることができる。(DP4「協働性・先導力」)
カリキュラム・ポリシー	学位授与の方針を実行・達成するために、以下の方針で教育課程を編成・実施します。	教育課程の編成と教育内容	大分大学大学院教育学研究科では，学位授与方針(ディプロマ・ポリシー)に掲げる 4 つの能力を学修するために，次のような教育内容と方法を取り入れた授業を実施する。 1.　教職に求められる高度な専門的資質・能力の基礎となる学識，教養および技能を身につけるために「基礎理論科目(共通 5 領域)」を開講し，必修とする。(DP2「専門性」の育成) 教職大学院では，総合的な指導力を育成するために履修すべき基本的要素として共通に開設すべき 5 つの領域が提示されている。本教育課程では，この共通 5 領域に関する科目として，まず必修の「基礎理論科目」を領域毎に 1 科目(2 単位)，計 5 科目(10 単位)を開講し，すべての院生が共通で受講することとする。ここでは，個々の領域に関わる教育理論や実践上の課題について基礎的・専門的な知識や現状の課題の理解を深める。 2.　様々な知見を活用し，他者と協働して課題解決できる力を身につけるため「実践演習科目(共通 5 領域)」を選択必修とする。(DP4「協働性・先導力」の育成) 共通 5 領域に関する科目として，「実践演習科目」を開講する。「基礎理論科目」で習得した知識や課題認識を基盤として，現実に直面しうる教育課題の理解と課題解決のための実用的な知識・技術を習得するための学びを行う。「学校マネジメント」(領域 4)，「教科指導・児童生徒理解」(領域 2，3)，「特別支援教育」(領域 2，3)の 3 分野に わたる 6 科目の中から，各院生のキャリアステージ(新人・中堅・管理職教員など)や修学目的に応じて一つの分野を選択し，2 科目計 4 単位を習得する。さらに全員必修の科目として「学校実践総合演習」(領域 5)を受講する。この科目では，各分野で実践的な専門性を高めた院生同士がチームを組み，ラウンドテーブルやケーススタディのスタイルで協働的な課題解決の方法を習得する。「基礎理論科目」の必修 10 単位と合わせ，16 単位を共通 5 領域に関する必須取得単位とする。 3.　各々の院生の問題意識や関心に応じて発展的に学修できるよう「高度専門科目」を設置する。(DP2「専門性」の育成) 教職大学院では，年齢，経歴，学校種，専門領域も異なる多様な院生が共に学ぶ。それぞれの学びの目的や背負っている使命，修了後の学校における役割なども異なっている。そこで，「高度専門科目」では，各院生が自らのニーズに応じて選択可能な科目を開講する。「児童生徒理解・学級経営に関する領域」，「授業研究・授業開発に関する領域」，「学校マネジメントに関する領域」，「特別支援教育に関する領域」，「学校研究に関する領域」の 5 領域計 22 科目の中から，5 科目(10 単位)以上を選択し履修する。 4.　教育現場における教育活動や実務全般を総合的に体験することで，教職の社会的役割や使命を理解し，学修を教育活動に生かすことができる実践力を身につけるため「実習科目」を必修とする。(DP1「使命感・責任感」，DP2「実践力」の育成) 「実習科目」では，各々の修学目的に応じて，「学校実践」(新人・中堅教員)，「学校経営」(管理職候補教員)，「特別支援」(特別支援学校教員)のいずれかの領域の実習を選択し履修する。各領域の実習は 2 年間で 10 単位(計 400 時間)の必修科目となる。現職院生は，教育学部附属校園や連携協力校における基礎的な実習を経たのち，自らの現任校における実習を行う。 5.　高度な専門的知識を基盤に実践を省察し，課題解決に向けて教育活動を創造できる力を身につけるために「省察科目」を必修とする。(DP3「省察力・創造性」の育成) 実習における実践経験に基づいて習得した知識・技術を，教育理論の観点から省察し，新たな課題発見や教育活動の改善・開発を行う力を育成するために「省察科目」(2 年間計 8 単位)を開講する。なお，実習科目と省察科目を通した「理論と実践の往還」による学びの成果は，教育実践研究報告書(1 単位)としてまとめ提出することを必修とする。 以上 1.～5.の科目の実施においては，学校現場での実習や実際の教育実践を題材とした「理論と実践の往還」を取り入れる。		
		教育方法	1. 「理論と実践の往還」による学びを促進するために，研究者教員と実務家教員の複数による共同開講のスタイルを採る。単なるオムニバスの形式にはせずに，毎回の授業がティーム・ティーチングのスタイルで，学術的，理論的な面と実践的，経験的な面の両面からの指導を実施していく。 2. DP2「専門性」の育成のために，「基礎理論科目」では，理論的知見に関して，講義，もしくは演習における院生の発表や議論を通して理解を深めた後，具体的な実践事例にあてはめることで，その理論の実践的な価値・意義を確かめ，さらには，指導案や学級経営案などの指導計画を，グループワーク等を通じて作成し，その効果について意見を交わすといったアクティブ・ラーニングの手法を実施する。 3. DP4「協働性・先導力」の育成のために，「実践演習科目」では，現実に起こりうる問題を想定して，その課題解決を疑似体験しながら学びを深める。また，各院生と担当教員が異なる役割や立場(例えば，校長，教頭，主任，学級担任，保護者，特別支援教育コーディネーターなど)をとり，学校現場を想定したロールプレイの中で，教育課題の解決を疑似体験するといったアクティブ・ラーニングの手法を実施し，学校における個々の教員としての在り方や協働的な関係の中での自らの役割について省察を深める。 4. DP2「専門性」の育成のために，「高度専門科目」では，優れた成功事例だけでなく，失敗例も含めた事例検討，指導計画や経営計画の構想，指導場面や保護者対応場面を想定したロールプレイ，模擬授業や模擬職員会議，専門家(教員)を交えた模擬ケース会議など，多様なアクティブ・ラーニングの手法を導入し，実践を想定した知識の活用，応用を体験的に学んでいく。 5. DP2「専門性」，DP4「協働性・先導力」の育成のために，「基礎理論科目」や「学校実践総合演習」などの必修科目をはじめ，多くの科目において新卒の院生と現職の院生の学び合いの機会を設け，チーム学校における教員同士の協働による問題解決の疑似体験といったアクティブ・ラーンニングの場とする。 6. DP1「使命感・責任感」，DP2「実践力」，DP3「省察力・創造性」の育成のために，実習が単なる実践経験の積み重ねで終わらないように，常に「省察科目」を実習と同時並行で行い，学校現場と大学の往還によって理論との融合・照合を図る。		
		学修成果の	1. 教員としての資質が身についているかを確認するために，資質能力変容調査(院生による自己評価)の結果を検証する。		

		評価	2. 授業科目の成績分布の検証作業や授業評価アンケートを通して，授業理解度や学修状況を検証する。 3. 大学院修了予定者に対してカリキュラムや授業内容，施設設備，学生支援体制に対する満足度などを問うアンケート調査を行い，院生による大学院教育に関する評価を把握する。 4. 教職大学院実習運営協議会，教育課程連携協議会での協議を通して，カリキュラムおよび学生指導体制の改善を行う。 5. 教育実践研究報告会において教育実践に係る研究成果を評価することで，研究指導体制の改善を行う。 6. 授業の成績分布，院生へのアンケート，修了生へのインタビュー，および所属校や教育委員会からの評価などのデータを蓄積し，教員採用試験の結果(採用数，合格率等）を検証することで，教員養成機能の評価を行うとともにカリキュラムの改善を行う。